嶋谷市左衛門
小笠原諸島巡検 350 周年
記念事業実行委員会

嶋谷市左衛門 耀ける航跡

嶋谷市左衛門―地図になき無人島への航海

寛文９（1669）年末、紀州（現在の和歌山県）で蜜柑を積んで江戸へ向かっていた阿波（現在の徳島県）の船が、志州安乗浦（現在の三重県志摩市阿児町安乗）を出航後に遭難しました。約 70 日間漂流した末に無人島へと漂着し、その場所は、現在では母島であったと考えられています。その後、乗組員たちはおよそ 50 日間島に滞在し、父島・聟島、さらに八丈島を経由して帰還しました。この出来事は幕府に報告され、八丈島の先に地図になき未知の無人島が存在することが知られる契機となりました。

八丈島以南の「人無島」への巡検

延宝２（1674）年、幕府の勘定頭から内々に、長崎代官を務める末次平蔵に対し、八丈島付近に「人無島」があるとの情報の真偽を確かめるよう命が下されました。その際、船頭には嶋谷市左衛門、上乗（積荷の管理者）に中尾庄左衛門を命じることも伝えられています。嶋谷市左衛門たちは、同２年に一度出航しましたが、おそらく天候不順のため帰帆しています。翌延宝３（1675）年の閏４月５日、下田（現在の静岡県）を再び出発し、２日後には八丈島に到達、さらにその４日後には「おが島」（現在の青ヶ島）を通過しました。そして、出発から約１週間後の閏４月 11 日朝には、八丈島から約 380km 離れた地点に達しています。しかし、その後の航海は、風にあおられるなどして困難を極めました。当初は南を目指していたものの、風に流されて北西方向へと進路を逸れ、東に修正したのち、再び南東へと針路を取ります。夜になって方角を変えている記録が散見されることから、星を頼りに針路を調整しながら、島影を探して航行が続けられていたと推測されます。そして、閏４月 29 日朝、ついに島影を発見します。辰の方角（東南東）へおよそ 25 里（約 100km）進んだところで、島（父島）を視認し、一行は、それが目的の島であるかどうか確認するため向かったのでした（図１）。

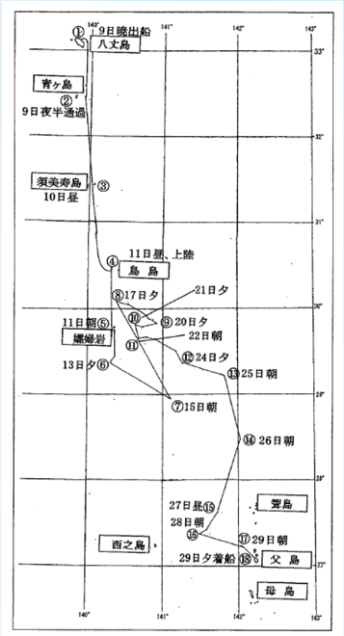

図１　「無人嶋探索航跡図（自八丈島～至父島）」（浦川和男「小笠原諸島発見史（日本船編）」〔『LAMER』36(2)、（公財）日本海事広報協会、2011 年〕から転載）

巡検を成功に導いた嶋谷市左衛門の知識

八丈島以南の「人無島」への巡検成功には、嶋谷市左衛門の存在があります。この巡検に使用された船は、長崎で建造された「唐船造之御船」であり、浦川和男の研究によると 4500 石（約 675 トン）ほどの大型船であったとされています[1]。幕府から船頭に指名されるということは、嶋谷が幕府から厚い信頼を得ていた証といえるでしょう。また、この巨大な船の船頭として船員を統率して航海した事実からも、彼らからの信用が厚かったこと

がうかがえます。その信用の背景には、嶋谷が優れた按針役（水先案内人）であったことが要因にあると考えられます。彼は磁石だけではなく、天体観測用のアストロラーベといった機器や四分儀（天体の地平線からの高度を計測する道具）を用いた南蛮流航海術の知識を有しており、天体観測による高度な航法を実践できる人物だったのです（図２）。

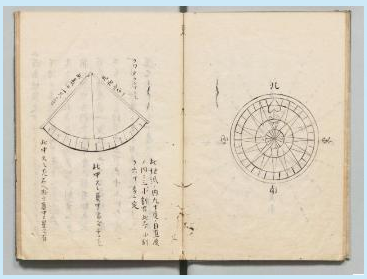

図２　嶋谷市左衛門『按針之図』
国立公文書館蔵

「人無島」の探索

延宝３年５月１日以降、一行は島に上陸し、船に積載していた切組（解体式の木材）で小船を組み立て、それを用いて島の周囲を航行し、海上からの調査も行いました。さらに、陸上および海中の調査（海の深さや海藻の分布状況など）も実施し、現在の父島・母島に天照大神宮、八幡大菩薩、春日大明神の三社を祀る御宮をたて、「延宝三年卯五（ママ）月吉日」付で、嶋谷市左衛門、中尾庄左衛門、嶋谷太郎右衛門、八兵衛の四人が名を連ね、「大日本之内也、島々為見分即閏四月廿九日致着船、同六月五日ニ日本出船伊豆下田ニ同十二日着船仕候」との脇付けを残したと記録には残されています。

図３　『無人嶋全図』
神戸市立博物館蔵

また、嶋谷市左衛門たちの訪島時に作成されたと考えられる絵図には、島の大きさや海深といった地勢が精密に記録され、浜辺や岩礁の位置なども精密に描写されています（図３）。さらに、島に自生する植物・動物・鉱物類の調査も行われ、一部は採取され本土へ持ち帰られて幕府へ報告されました。幕府奥絵師の狩野常信（かのうつねのぶ）が延宝３年６月 27 日に描いた「かちやんノミ」（タコノキの実 図４ａ）、同年７月 13 日に描いた「新嶋来島也」（メグロ 図４ｂ）は、嶋谷たちが持ち帰った実物の姿を知れる貴重な資料です。

嶋谷たちの功績により、幕府は八丈島よりさらに南に位置する島嶼の存在を確認し、未知の動植物や地理的情報、物産を通じて新たな知見を得ることができました。こうした成果は、後の明治９（1876）年に明治政府が小笠原諸島を日本の領土として確定する際、嶋谷たちの航海が日本領有の重要な根拠の一つとされることにつながったのです。

図 4a　狩野常信「草花魚貝虫類写生図 巻 10_本文 11」東京国立博物館蔵
Image:TNM Image Archives

図 4b　狩野常信「鳥写生図巻 第 1 巻」東京国立博物館蔵
Image:TNM Image Archives

注 1: 浦川和男「17 世紀後期の延宝無人島探検船の実像を追う」『平成 22 年度　長崎市歴史民俗資料館特別企画展「長崎の海と船展」―長崎の海を舞台に繰り広げられた、歴史を物語る品々―』長崎市歴史民俗資料館、2010 年。

（長崎県立大学地域創造学部教授　松尾晋一）

※ 令和７（2025）年が嶋谷市左衛門 小笠原諸島巡検 350 周年でした。

令和８（2026）年３月発行
発行者　嶋谷市左衛門小笠原諸島巡検 350 周年記念事業実行委員会
発行所　〒100-2101 東京都小笠原村父島字西町 小笠原村教育委員会内　電話　04998-2-3117